

## 世阿弥の伝書における花

【世阿弥の伝書】

『花伝（風姿花伝）』『花習内抜書』『音曲口伝』『花鏡』『至花道』『一一曲一一体人形図』『曲付次第』  
『風曲集』『一一道』『遊楽習道風見』『五位』『九位』『六義』『拾玉得花』『五音曲条々』『五音』  
『習道書』『世子六十以後申楽談儀』『夢跡一紙』『却来華』『金島書』

### 【第七別紙口伝 花を知る事】

花は珍しいから面白

この口伝に花を知る事。まづ、仮令、花の咲くを見て、よろづに花と譬へ始めし理をわきまふべし。

そもそも、花といふに、万木千草において、四季折節に咲くものなれば、その時を得てめぐらしきゆゑに、もてあそぶなり。申楽も、人の心にめぐらしきと知る所、すなはち面白き心なり。花と面白きとめぐらしきと、これ三つは同じ心なり。いづれの花か散らで残るべき。散るゆゑによりて、咲く頃あればめぐらしきなり。能も住する所なきを、まづ花と知るべし。住せざして、余の風体に移れば、めづらしきなり。

### 【第一年来稽古条々 二十四五】

時分の花に惑わされずまことの花を極めよ

この頃、一期の芸能の定まる初めなり。さるほどに、稽古の境なり。声もすでに直り、体も定まる時分なり。されば、この道に二つの果報あり。声と身形なり。これ二つは、この時分に定まるなり。年盛りに向かふ芸能の生ずる所なり。

さるほどに、よそ目にも、「すは、上手出で來たり」とて、人も目に立つるなり。もと名人なれども、当座の花にめづらしくして、立合勝負にも一旦勝つ時は、人も思ひ上げ、主も上手と思ひ染むるなり。これ、かへすがへす主のため仇なり。これも、まことの花にはあらず。年の盛りと、見る人の一旦の心のめづらしき花なり。まことの目利きは見分くべし。

この頃の花こそ初心と申す頃なるを、極めたるやうに主の思ひて、はや申楽に側みたる輪説をし、至りたる風体をする事、あさましき事なり。たとひ、人も褒め、名人などに勝つとも、「これは一旦めづらしき花なり」と思ひ悟りて、いよいよ物まねをも直にし定め、名を得たらん人に事を細かに問ひて、稽古をいや増しにすべし。されば、時分の花をまことの花と知る心が、眞実の花になほ遠ざかる心なり。ただ、人ごとに、この時分の花に迷ひて、やがて花の失するをも知らず。初心と申すはこの頃の事なり。

## 老木の花

【第二物学条々 老人】

老人の役の演技は老木に花の咲かんがごとし

老人の物まね、この道の奥義なり。能の位、やがてよそ目にあらはるる事なれば、これ、第一の大  
事なり。

およそ、能をよき程極めたる為手も、老いたる姿は得ぬ人多し。たとへば、木樵・汐汲の態物など  
の翁形をし寄せねれば、やがて上手と申す事、これ誤りたる批判なり。冠・直衣、烏帽子・狩衣の老  
人の姿、得たらん人ならでは似合ふべからず。稽古の功入りて、位上らでは似合ふべからず。

また、花なくば面白き所あるまじ。およそ、老人の立ち振舞、老いぬればとて、腰・膝をかがめ、  
身をつむれば、花失せて、古様に見ゆるなり。さるほどに面白き所稀なり。ただ、大かた、いかにも  
そぞろかで、しとやかに立ち振舞ふべし。

ことさら、老人の舞がかり、無上の大事なり。花はありて年寄と見ゆるる公案、くはしく習ふべし。  
ただ老木に花の咲かんがごとし。

### 【第七別紙口伝 老木の花】

#### 老人は若々しくありたいと思つている

また、老人の、花はありて年寄と見ゆるる口伝といふは、まづ、善惡、老したる風情をば心にかけ  
まじきなり。そもそも、舞・はたらきと申すは、よろづに樂の拍子に合はせて、足を踏み、手を指し  
引き、振り・風情を拍子に当ててするものなり。年寄りぬれば、その拍子の當て所、太鼓・歌・鼓の  
頭よりは、ちちと遅く足を踏み、手をも指し引き、およその振り・風情をも、拍子に少し後れるやう  
にあるものなり。この故実、何よりも年寄の形木なり。この宛てがひばかりを心中に持ちて、その外  
をば、ただ世の常に、いかにもいかにも花やかにすべし。まづ、仮令も、年寄の心には、何事をも若  
くしたがるものなり。さりながら、力なく、五体も重く、耳も遅ければ、心は行けども振舞のかなは  
ぬなり。この理を知る事、まことの物まねなり。態をば、年寄の望みのごとく、若き風情をすべし。

これ、年寄の若き事を羨める心・風情を学ぶにてはなしや。年寄は、いかに若振舞をすれども、この拍子に後れる事は、力なくかなはぬ理なり。年寄の若振舞、めづらしき理なり。老木に花の咲かんがごとし。

## さまさまな「花」

### 【第七別紙口伝 十体を得べき事】

珍しさを保つためにあらゆる役柄を演じられるようとする

一、能に十体を得べき事。十体を得たらん為手は、同じ事を一廻り一廻りづつするとも、その一通りの間久しかるべきれば、めづらしかるべき。十体を得たらん人は、その内の故実・工夫にては、百色にもわたるべし。まづ、五年・三年の内に一遍づつも、めづらしく替ふるやうならんずる宛てがひを持つべし。これは、大きなる安立なり。または、一年の内、四季折節をも心にかくべし。また、日を重ねたる申楽、一日の内は申すに及ばず、風体の品々を色どるべし。かやうに大綱より初めて、ちとある事までも、自然自然に心にかくれば、一期、花は失せまじきなり。

### 【第七別紙口伝 年々去來の花】

#### 同じ役柄でも演じ方が違えば珍しい

また云はく、十体を知らんよりは、年々去來の花を忘るべからず。年々去來の花とは、たとへば、十体とは物まねの品々なり。年々去來とは、幼なかりし時のよそほひ、初心の時分の態、手盛りの振舞、年寄りての風体、この時分時分の、おのれと身にありし風体を、みな当芸に一度に持つ事なり。

ある時は年盛りの為手かと覚え、または、いかほども虧たけて、功入りたるやうに見えて、同じ主とも見えぬやうに能をすべし。これすなはち、幼少より老後までの芸を、一度に持つ理なり。さるほどに、「年々去り来る花」とは言へり。

### 【第七別紙口伝 秘する花】

どのように演じるかをライバルにも観客にもさとられない

一・秘する花を知る事。秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず、となり。この分け目を知る事、肝要なり。

そもそも、一切の事、諸道芸において、その家々に秘事と申すは、秘するによりて大用あるがゆゑなり。しかれば、秘事といふ事をあらはせば、させる事にてもなきものなり。これを、「させる事にてもなし」と言ふ人は、いまだ秘事といふ事の大用を知らぬがゆゑなり。

まづ、この花の口伝におきても、「ただめづらしきが花ぞ」と皆人知るならば、「さてはめづらしき事あるべし」と思ひ設けたらん見物衆の前には、たとひめづらしき事をするとも、見手の心にめづらしき感はあるべからず。見る人のため花ぞとも知らでこそ、為手の花にはなるべけれ。されば、見る人は、ただ思ひの外に面白き上手とばかり見て、これは花ぞとも知らぬが、為手の花なり。さるほどに、人の心に思ひも寄らぬ感を催す手立、これ花なり。

### 【第七別紙口伝 因果の花】

どう頑張つてもうまくいかない時がある

一、因果の花を知る事、極めなるべし。一切みな因果なり。初心よりの芸能の数々は因なり。能を極め、名を得る事は、果なり。しかれば稽古する所の因疎かなれば、果を果たす事も難し。これをよくよく知るべし。

また、時分にも恐るべし。去年盛りあらば、今年は花なかるべき事を知るべし。時の間にも、男時・女時とてあるべし。いかにすれども、能にも、よき時あれば、かららず悪き事またあるべし。これ、力なき因果なり。これを心得て、さのみに大事になからん時の申楽には、立合勝負に、それほどに我意執を起さず、骨をも折らで、勝負に負くるとも心にかけず、手を貯ひて、少な少など能をすれば、見物衆も「これはいかやうなるぞ」と思ひ醒めたる所に、大事の申楽の日、手立を変へて、得手の能をして、せいれいを出だせば、これまた、見る人の思ひの外なる心出で来れば、肝要の立合、大事の勝負に、定めて勝つ事あり。これ、めづらしき大用なり。この程悪かりつる因果に、またよきなり。

### 【第七別紙口伝 人々心々の花】

#### その時の観客を楽しませるものが花になる

一、そもそも、因果とて、よき・悪しき時のあるも、公案を尽くして見るに、ただ、めづらしき・めづらしからぬの二つなり。同じ上手にて、同じ能を、昨日・今日見れども、面白やと見えつる事の、今まで面白くもなき時のあるは、昨日面白かりつる心慣らひ、今日はめづらしからぬによりて、悪しと見るなり。その後、またよき時のあるは、先に悪かりつるものと思ふ心、まためづらしきに返りて、面白くなるなり。

されば、この道を極め終りて見れば、花とて別にはなきものなり。奥義を極めて、よろづにめづら

しき理を我れと知るならでは、花はあるべからず。

経に云はく、「善惡不二、邪正一如」とあり。本来よりよき・悪しきとは、何を以て定むべきや。ただ、時によりて、用足る物をばよき物とし、用足らぬを悪しき物とす。この風体の品々も、当世の数人、所々にわたりて、その時のあまねき好みによりて取り出だす風体、これ、用足るための花なるべし。ここにこの風体をもてあそめば、かしこにまた余の風体を賞翫す。これ人々心々の花なり。いづれをまことにせんや。ただ、時に用ゆるを以て、花と知るべし。

## 花（木・草）の作り物

立木	丸台または角台に木を立てて花を付ける				
塚・山	嵐山（桜）	右近（桜）	雲林院（桜）	小塩（桜）	吉野天人（桜） 梅（梅）
胡蝶（梅）	羽衣（松）	松風（松）	九世戸（松）	藤（藤懸松）	玉井（桂）
道明寺（鶴）					
竹の骨組みを布で覆つた塚や山の上に花などを付ける					
西行桜（桜）	紅葉狩（紅葉）	隅田川（柳）	遊行柳（柳）	定家（定家葛）	
一畳台	一畳程度の広さの台を出し、隅に立ち木を立てたり、台上に垣根を設けたりする				
小屋	石橋（牡丹立木）	菊慈童（菊籬）	枕慈童（菊籬）	谷行（鶴立木）	
竹で組み立てた小屋の扉や側面に花などを付ける					
その他	三笑（白菊）	半蔀（青瓢）	三輪（杉）	一角仙人（葛葛）	
	井筒（薄）	鉢木（鉢木）	など		
手に持つ花・木・草など					
嵐山（桜枝）	小塩（桜枝）	簾（梅枝）	水無月祓（麻枝）		
百万（笹）	三井寺（笹）	隅田川（笹）	芦刈（挟芦）	敦盛（挟草）	木賊（挟木賊）
野宮（木葉）	忠度（木葉）	朝長（木葉）	井筒（木葉）	采女（木葉）	芭蕉（木葉）
项羽（花）	雲雀山（挿花）	葛城（楚樹）	錦木（錦木）	花筐（花筐）	
大原御幸（手籠）	二人静（手籠）	通小町（手籠）	和布刈（手籠）	求塚（籠）	